

埋蔵文化財 愛知

No. 28



室遺跡より巨大木樋出土

西尾市室遺跡から平安時代中期の木樋が3本出土した。規模は最も大きなもので長さ8.7m、幅1.2mに及び、水田の灌漑に用いたものと考えられる。
(4・5ページに関連記事掲載)

シリーズ 江戸時代を掘る 4

清洲宿場町の考古学 ―宿場町論―

美濃街道

美濃街道は名古屋と大垣を結び、中山道を経由して京都へ至る幹線である。その道中には清洲・稲葉・萩原・起・墨俣・大垣の宿場が設けられている。清洲は名古屋城から杷杣島橋を渡って最初に所在する宿駅として、現在も長者橋の東部や古城跡の西部などに町並みを残す宿場町である。清洲宿場町の発掘調査は、五条川河川改修に伴って清洲城下町遺跡として行われている。調査は五条川東岸の部分的なものに止まり、五条川西岸にある清洲宿本体の全容は全く不明であるが、新たな知見も得られている。

清洲宿の歴史

清洲宿は1616年に五条川西岸の桑名町に宿駅が設置され、その後幾度かの拡張と改変の歴史を経ている。とりわけ、五条川東岸部の様子は1794年の五条川の瀬替えによって大きく変化し、これを境に前期・後期に区分できる。

後期宿場町の街道は、清洲の中心的な役割を果たす道路として、現在に至るまで利用されている。これに対し、前期宿場町の街道は現在の堤防の下に通るものと推定される。前期の街道は、清須城下町の中堀の虎口（出入口）部分から南下する戦国時代の道路を継承したものと考えられ、発掘調査の結果から、街道の側溝と推定される溝がほぼ南北方向に何度も掘り直される形で見つかっている。ところが、1794年に五条川の瀬替えに伴って前期の街道を覆う形で堤防の建設が行われ、後期宿場町の街道は東に移動した。結果として、これまで前期宿場町の実態は全く謎の状態となった。

清洲宿場町の町並み

清洲宿場町の様子は発掘調査によって徐々に解明されている。特に、前期宿場町に関しては、堤防に完全に覆われた部分で当時の状況をよく残している。街道の西側には道路に直交する溝や柵列が発見され、街道の両側に間口の狭い屋敷地が立ち並んでいる様子が判明した。このよ

うな長方形の屋敷地が道路に面して並ぶ屋敷割を短冊型地割と呼んでいる。屋敷地の中には、掘立柱建物・井戸・畑（畝状遺構）・ゴミ穴などが展開している。畑が街道ぞいの町並みに混在するのは、調査地点が宿場町の本体ではなくて周辺部に位置しているためであろう。

一方、後期宿場町に関しては前期で見られたような屋敷境を区画する施設や建物は発見されていない。発掘調査の成果としては、①現美濃街道に沿って井戸が並んでいることと、②更に街道から離れた奥に巨大な廃棄土坑が存在することが明らかになった。井戸は美濃街道から約30m離れた位置に10～15m間隔で配置されており、一屋敷地に井戸が1基ずつ設けられた間口の狭い屋敷が配列していたと思われる。前期宿場町の場合と同様、短冊型地割の屋敷地をもつ町屋が展開したことが想定できよう。また、この屋敷の裏手にはゴミ穴が掘られ、濃尾地震の際に生じた廃棄物を投棄した巨大な土坑も見られる。

遺構配置から見た宿場町の構造の特徴は、①街道の移動に伴う形で町自体も移転し、②町割は一本街村状の街区に短冊型地割を形成している点があげられ、街道に大きく規制された町構造を呈する。また、名古屋城・吉田城などの武家屋敷と比べれば、屋敷地の間口・奥行きなどの規模は格段に小さく、屋敷内構造も建物・井戸・ゴミ穴が一行に並ぶ単純な配置となる。

宿場町に住む人々の生活

江戸時代の遺跡からは莫大な量の遺物が出土する。これは武家屋敷・宿場町に限らない現象である。では、武家屋敷と宿場町ではその内容や量に差があるのだろうか。清洲宿場町と名古屋城三の丸遺跡を対比してみよう。

清洲宿場町から出土する遺物には、生活の多様化を反映して茶碗・皿・灯明具・播鉢・徳利・甕・鍋など多種多様なものがある。これらの大半は、日常生活において各用途に応じて使わ

れた道具と思われる。一方、名古屋城三の丸遺跡の武家屋敷では、こうした日常生活道具の他に、中国産の精巧な磁器・楽茶碗・南蛮人を描いた皿・蒔絵を施した漆器などが見られる。このような“高級品”は、武士の豪奢な生活を表している一方、その中には日常生活とは異なる各種儀礼に使用された道具もあったと考えられる。もしそうであるとすれば、宿場町と武家屋敷の遺物の差（生活の差）は非日常的用具のあり方に歴然と現れている可能性がある。

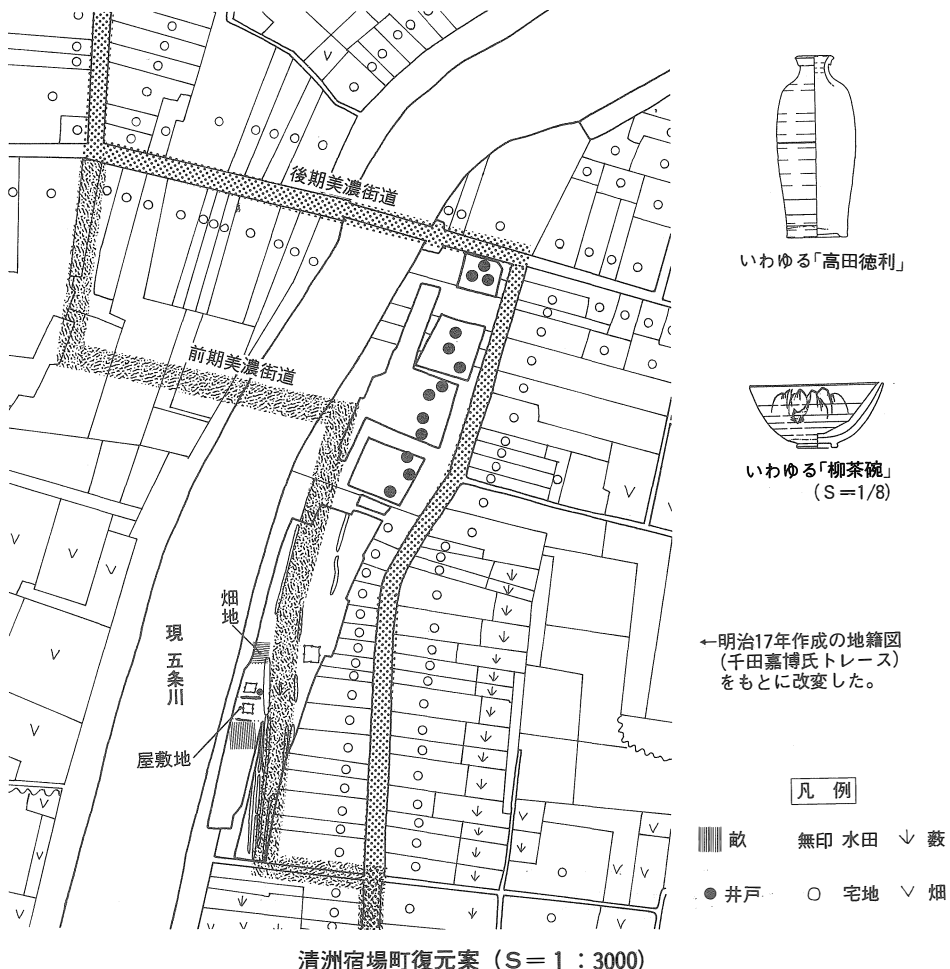
一方、日常生活道具にも宿場町と武家屋敷との間に相違が見られる。口が窄まる“高田徳利”や柳を描いた“柳茶碗”は宿場町では普通に見られるが、武家屋敷では余り見られない。このような特定の器種の有無は、武士とは異なる町

人独自の日常生活様式が存在していたことを予感させる。戦国時代の場合には“高田徳利”のような町屋にあって武家屋敷にはない生活道具が認められないことから、各階層の生活の多様化が江戸時代に一気に進んだ事が伺えよう。

近世の歴史像を求めて—近世考古学の課題—

このように、遺構・遺物の様相を分析すると近世の実像の一端が見えてくる。近世は古文書や古記録などの文献が多く残り、その文化は現在の生活の中に生きている。一見良く分かっていると思われるこの近世という時代は、意外にその生活や歴史像などは明確ではない。近世考古学はこうした課題を解決する一つの手段であり、われわれは問題意識を持って調査に臨む必要があるだろう。

(鈴木正貴)



特報

室遺跡出土の木樋について

西尾市

室遺跡の中世を中心とする集落については、先号で概略を示した。今回は、遺跡の西部で地表下3mから検出された平安時代中期の「木樋を含む導水施設」を紹介する。

「木樋を含む導水施設」とは、3本の木樋と木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み、木樋北の土手状遺構、木樋北東の杭列群を伴う落ち込み、それに接続する溝で構成される。

〔木樋〕

木樋Aは、長さ3.9m以上(西の一端は調査区外に伸びているので全長は不明)、幅0.9m、内法0.8m、深さ0.2mの規模をもち、他の2基と同じく丸太を半割にしてU字形にくりぬいてあるが、蓋はない。埋土は白色砂が堆積している。開口している東端部には、えぐり込みによる段差があり、組み合わせ式になっていたと考えられる。開口部では開口部方向に傾斜し下がっているが、西半部は反対方向にやや傾斜している。材はクスノキ。

木樋Bは、長さ8.7m、幅1.2m、内法0.9m、深さ0.3mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいている(土圧のため側壁部と中央部で縦に割れている)。側壁部の上端部には4ヶ所のえぐり込みを入れ、合計8本の横木を渡し、その上に板材5枚を縦方向に敷いて蓋としている。板材の中には転用材もある。木樋の中の土は周囲と同じ青灰色シルトで砂はない。内部より「田」と墨書された須恵器碗の破片が出土した。木樋Aと同じく開口部方向に傾斜(約5°)し下がっているが、木樋に沿って打たれた木樋を留めるための杭の先端のレベルを見るとほぼ同じであることから、本来は水平か水平に近かったと思われる。材はヒノキである。

木樋Cは、木樋Bの真下に同じ方向に設置しており、現時点(3月初め)では未調査であるため規模など詳細は明らかでないが、側壁部の上端部にえぐり込みがあり蓋がのっているなど

木樋Bとほぼ同じ形状であると思われる。また開口部方向に傾斜している点も木樋Bと同じである。材も同じくヒノキである。

〔木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み〕

木樋A・B・Cの開口部を取り巻いて、東西6.7、南北4m、深さ1mの落ち込みがある。木樋Cの開口部は完全にこの落ち込みの中にある。この落ち込みに伴って不規則な杭群とそれに加工痕の見られない自然木(流木)が絡んで検出された。杭の中には直径20cmと太く2m近いものもあるが、その他はおおよそ10cm前後の太さである。自然木は一部木樋の上にもある。この乱杭の中から「万」と墨書された灰釉陶器の皿が出土している。

〔土手状遺構〕

木樋Cの北で、木樋の長軸に直交する方向に幅5m、高さ0.5mほどの土手状遺構の痕跡がある。小枝を払った細い枝やヨシ・アシの類を水平に(木樋に近づくにしたがって傾斜しながら)敷き、暗灰色土と交互に12層以上積み重ね版築状に盛ってある。またこれを留める機能を持つと思われる杭が打たれている。切り合い関係から、この遺構は、木樋Cに関わる土手状遺構と考えられる。

〔杭列群を伴う落ち込み〕

この乱杭群の東に、急に深くなる東西7m、南北8m、深さ1.3mの規模の長方形を呈する落ち込みがあり、その中に杭列がある。杭列は5列と見られ、東の2列は短い、西の3列は長く、特に中央のは2本セットで南北に弧状に貫き北の溝と接続している。杭は先端のみ削ってとがらせ残りは樹皮を残している丸太杭がほとんどで、太さも10cm前後が圧倒的に多い。杭の先端は落ち込みの底には届かず、落ち込みが掘削された時期と杭列が打たれた時期に差があることを示している。

〔溝〕

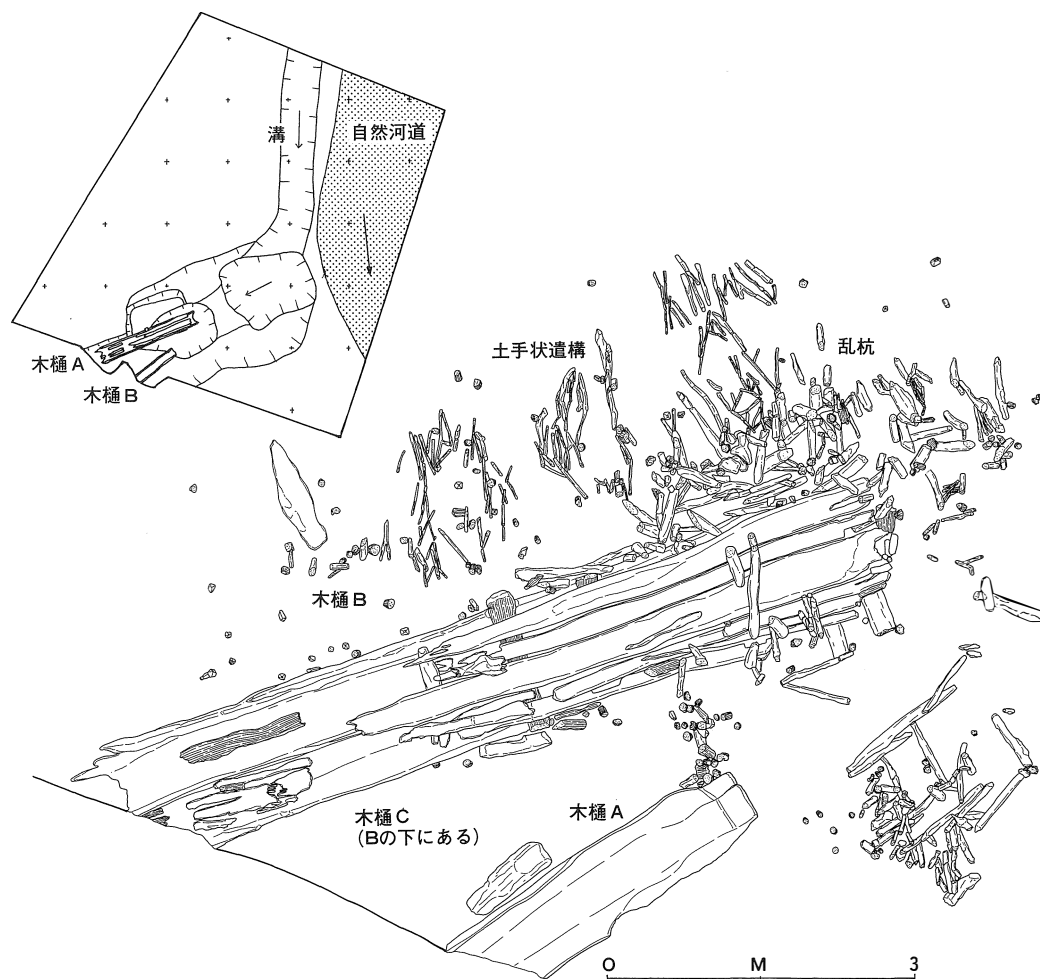
杭列を伴った落ち込みにつながる溝は、幅4m、深さ1mの規模を有し、ほぼ南北に16m走り、調査区外に続いている。この溝には護岸用の杭列が両肩に見られる。

木樋内部および周辺で検出された須恵器や灰釉陶器からみて、木樋A・Bの築造時期は平安時代中期（O-53）と考えられる。木樋Cも形状や置かれた位置が木樋Bとほぼ同じであることからそれほどさかのぼるものではないと考えられる。

さて、この木樋を伴った導水施設の機能を整理しておくと、溝によって北から南に水を導き入れて、いったん落ち込み部に貯水したのち、土手状遺構で水位を高めて水をオーバーフローさせ、乱杭で流木・葉・ごみなどを除去してから木樋を通して南の高所に送水したと考えられ

る。ただし、出水側については調査区外であるため内容は分からないが、遺物の量が極めて少ないことから集落とするよりは水田である可能性が極めて高い。

弥生時代後期から古代にかけての木樋の検出例は、全国で10数例に過ぎず、また平安時代の地方での出土例は室遺跡以外にはない。室遺跡の木樋は、このように稀少な点で注目されるだけでなく、この地域における大型の木樋を使った灌漑施設を具体的に明らかにできる非常に貴重な資料と言えるのである。（都築暢也）



遺跡紹介

清洲城下町遺跡

西春日井郡清洲町

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の中央を南流する木曽川水系五条川の中流域に形成された自然堤防、および後背湿地上（標高約5m前後）に立地する、古代から近世にかけての複合遺跡である。昭和57年の調査開始より、今年度までの調査総面積も約5万㎡を越え、出土遺物もコンテナ4000箱、数十万点以上になろうとしている。

今年度の調査は、県道新川・清洲線関連調査847㎡と五条川改修関連調査4820㎡の合計5667㎡を実施している。発掘調査は現在も継続中であるので、ここでは今年度の調査の概略と、特異な遺構を検出している五条橋南の堤防下の調査区を紹介しておきたい。

まず、今年度の調査区の遺構としては、戦国時代から江戸時代の建物の礎石・区画溝、廃棄土坑、井戸、畑地などを検出している。その他、県道新川・清洲線関連調査の調査区では、旧五条川の跡や、鎌倉・室町時代の掘立柱建物と溝、奈良・平安時代の竪穴住居、溝、土坑などを検出している。さらに、城下町期の焼土面や、地震による断層・噴砂も確認している。

また、遺物としては、戦国時代から江戸時代の日常生活用具としての良好な陶磁器・木製品などを中心に出土している。

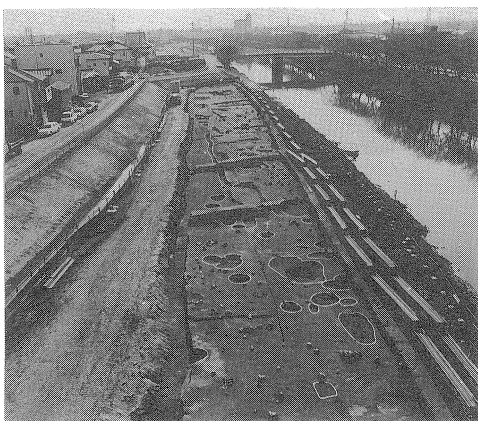
次に、城下町期後期（1586～1613）において五条川改修関連調査の調査区は、清須城中堀のすぐ南に位置し、これまでの発掘調査ではほとんど見られなかった、建物の礎石を数多く確認している。

本遺跡での礎石建物の検出例はこれまでに数例に止まり、このような集中的な検出状況は初めてである。礎石建物群の中には柱間約2mの3間×5間以上のもや、柱間約60cmの3間×5間の総柱建物も認められている。しかし、建物を囲む区画溝が見当たらないため、かなり広大な空間の存在を窺うことができる。

また、検出された礎石建物群の軸線が、大手筋である旧美濃街道に対しやや東側に傾いていることが注目される。このような建物群の軸線は、地籍図によれば現在の五条川の西側に広く展開する旧地割りの軸線にほぼ一致している。このことから、五条川瀬替え（1794）に伴う町割りの再編で不明になっていた城下町期後期の地割りではなかったかと推定される。

以上のことより、この調査地点は、これまでの武家屋敷や寺社地、町屋とは考え難いこと、中堀に近い位置にあること、さらに旧五条川と旧美濃街道に囲まれた広範な旧地割りをもつ地域の東端に当たることなどから、清須城そのものに直接関わる重要な場所ではないだろうか。

（小嶋廣也）



調査区全景



総柱建物

名古屋城三の丸遺跡

名古屋市

名古屋城三の丸遺跡は、その名が示すごとく近世尾張藩の藩城、名古屋城の三の丸の故地をもって遺跡としたものである。遺跡の周囲には国史跡に指定されている堀が巡っていて、かつてそこには東照宮など国家祭祀にかかわる施設や上級家臣団の屋敷などが立ち並んでいたのである。とはいえ、これまでの数地点におよぶ発掘調査の結果、単に近世の遺構・遺物にとどまることなく、弥生時代以来の連綿たる歴史を語る一大複合遺跡としての姿を顕にしつつある。

今回の調査地点は、二の丸の正面、愛知県警察本部の敷地内で、調査は、東西95m南北55mにわたる範囲のうち既破壊部分を除いた3600㎡が対象となっており、平成3年6月から12月にかけて実施された。遺跡は、本地点では上下二面の生活面があり、上面では近世の上級家臣の屋敷地が、下面では戦国期の城館跡が発掘調査された。ことに下面の遺構群は、織田信秀・信長父子が居城した那古野城の一画と思われ、注目されるところとなった。

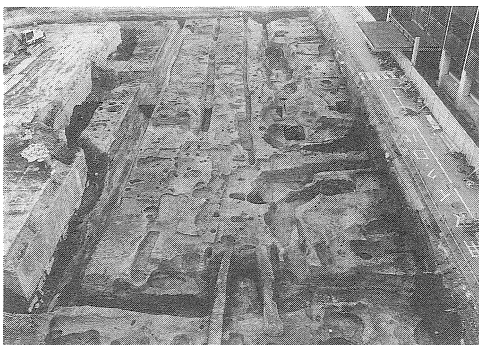
戦国時代の主な遺構としては、堀・柵列・井戸・方形竪穴建物跡などがある。縦横に走る堀は総てで6条あり、大きいものでは幅4m、深さ3.5mを測り、小さいものでも幅2.5m、深さ2mある。いずれも断面形が鋭いV字状となる薬研堀で、堀際には土塁を伴っていたものと考

えられ、なかには延長68mに及ぶも、なお調査区外へと延びているものもあった。

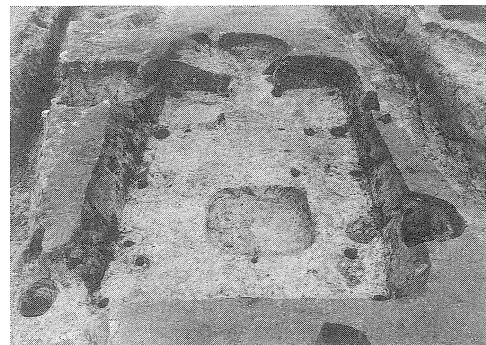
こうした堀によって区画される郭は、堀の配置構成から見て、それぞれが独立して存在したものではなく、いくつかの複数の郭が連結してより大きな空間をつくりだしていて、あきらかに複郭構造の城館の所在を示している。入口部分の構造も、防御機能をたかめた複雑なものとなっていて、虎口空間は未だ成立していないものの、平虎口の段階を一步抜き出した縄張りを明瞭に伝えている。

郭内の建物配置についてははっきりとしていないが、当地域では初例となる方形竪穴建物跡が一例検出されている。竪穴は、東西3.6m南北2.6mの長方形のプランを呈し、西辺には80cm程の半円形の突出部をもち、旧地表から80cmの深さに掘り窪められている。壁際には径10cmにみえない小柱穴が並ぶが、大きさからいって小屋組を支える柱とは考えがたく、むしろ棚等を支える柱か側板を押さえる柱と思われる。竪穴だけで単独の建物となっていたのではなく、建物の一角に竪穴は位置していたとも考えられ、あるいは地下室のような施設を想定することもできよう。

これらの遺構は、切り合い関係から大きく2時期に区分され、いずれも大窯Ⅱ期を主体とする遺物群を伴出していることから、天文～永禄年間の短期間に作り替えられ、廃絶されたものと思われる。(遠藤才文)



完掘状況

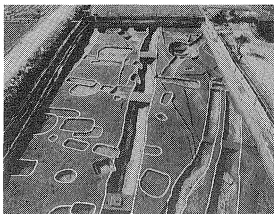


方形竪穴建物

発掘調査ニュース

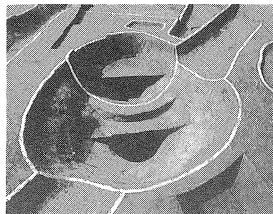
西上免遺跡

一宮市



A区上面完掘状況

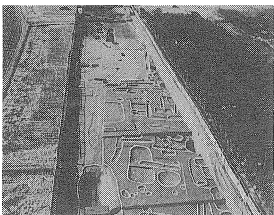
西上免遺跡は、一宮市今伊勢町及び尾西市開明町にかけてひろがる複合遺跡である。今回の調査は昨年に続く2度目の調査で、調査区も隣接している。A区では、鎌倉時代後半の土壌、溝、井戸等が検出された。さらに、下層では奈良時代の遺構が展開している。



井戸完掘状況

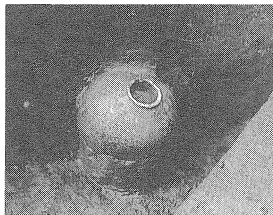
船橋宮裏遺跡

稲沢市



A区完掘状況

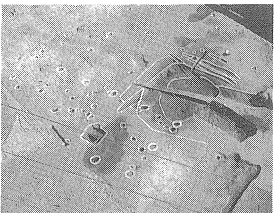
船橋宮裏遺跡は、稲沢市船橋町に所在する。1600㎡にわたる調査は1月末をもって終了している。A区では、全域にわたって土壌群が点在していた。また、骨片、炭化物、焼土等で埋まった土壌も5基検出した。いずれも14世紀後半から15世紀前半のものと考えられる。



遺物出土状況

伊保遺跡

豊田市



Bb区調査区全景

昨年度調査区の出側を調査し、Bb区において、13～14世紀の集落の一部を検出。南北3間の主屋の南に2×2間の建物を付属する掘立柱建物1棟があり、付属建物の内側に1辺90cmの方形土坑を持つ。その他、1辺5m程度の方形落ち込み2基を検出した。



Bb区柱根出土状況

センター日誌

来訪者

12/17・18 朝日新聞尾鷲通信局長 岡本武司氏
 1/9 愛知県下水道公社理事長 堀 宏治氏
 21 梶山女学園大学 杉藤重信氏他 2名
 22 名古屋市博物館 水谷栄太郎氏他 1名
 28 大阪文化財センター中西靖人氏他 3名
 2/3 公社事業対策委員会 17名
 県社会教育部長 樋口康則氏他 4名
 4 弥富郵便局 15名
 14 元興寺文化財研究所 北野信彦氏
 26 大口町教育委員会 5名
 3/2 海部農地事務所長他 1名

3/3 豊田市教育委員会 30名
 4 長島町教育委員会 2名
 10 豊田市逢妻公民館 30名

埋蔵文化財愛知 No. 28

発行日 平成4年3月31日
 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 編集 〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須
 発行 新田字野方802番24
 TEL 0567-67-4161～4163
 印刷 株式会社 クイックス